

令和2年度「日本遺産 (Japan Heritage)」認定概要

① 北海道 (◎標津町, 根室市, 別海町, 羅臼町) ※◎印は代表自治体 (以下同)

 ≪「^{さけ}鮭の^{せいち}聖地」の物語 ^{ものがたり}～^{ねむろ}根室海峡^{いちまんねん}一万年の^{みちのり}道程～≫

北海道最東の海、根室海峡。この地では、遥か一万年の昔から、絶えず人々の暮らしが続いてきました。その支えとなったのは、大地と海を往来し、あらゆる生命の糧となった鮭です。毎年秋に繰り返される鮭の遡上^{そじょう}という自然の摂理の下、当地では人と自然、文化と文化の共生と衝突が起こり、数々の物語と共に、海路、陸路、鉄路、道路という、根室海峡に続く「道」が生まれます。一万年に及ぶ時の流れの中で、鮭に笑い、鮭に泣いた根室海峡沿岸。ここはいまも、人と自然、あらゆるものが鮭とつながる「鮭の聖地」です。



【鮭山漬け寒風干し】



【野付半島】

【標津遺跡群伊茶仁
カリカリウス遺跡】

② 岩手県 (◎二戸市, 八幡平市)

 ≪”^{おくなんぶ}奥南部”^{うるしものがたり}漆物語 ^{あつびがわりゆういき}～^う安比川^{でんとうぎじゆつ}流域に受け継がれる^{でんとうぎじゆつ}伝統技術～≫

日本民俗学の祖・柳田國男は著書で、この安比川流域を、“奥南部”と称しています。安比川の上流域には木地師、中流域には塗師、下流域には漆掻きが多く住み、地域で一体的な漆器製作を行ってきました。生漆や漆工芸品の特産地としての誇りを胸に、漆産業を現在まで守り続けています。特に浄法寺漆は、とても良質で、日光東照宮陽明門などの日本を代表する国宝建造物の修復に使われ、日本の文化を支えています。

この物語は、“奥南部”安比川流域の人々が、漆を大切にそして誇りに思い、伝統技術・漆文化を繋いできた物語です。

“奥南部”漆物語に想いを馳せながら、地元の漆器で地元食材の料理と酒を味わう贅沢なひと時を過ごしてみたいはいかがでしょうか。



【漆器】



【漆掻き】

③ 茨城県（◎牛久市）、山梨県（甲州市）

《日本ワイン 140年史 ～国産ブドウで醸造する和文化の結晶～》

国産ブドウを原料とし、日本国内で醸造される「日本ワイン」。その140年にわたる歴史において重要な地位を占めるのが山梨県甲州市と茨城県牛久市である。甲州市は地元のブドウ農家との共存繁栄をはかり、広大なブドウ畑と新旧30ものワイナリーを誕生させるに至った。牛久市の「牛久シャトー」は、ブドウ栽培から醸造までの一貫した工程を構築し、大規模な醸造体制を確立した。明治の文明開化期、国営では果たせなかったワイン醸造を、それぞれの地域の特性を生かして民間の力で成し遂げたのである。切磋琢磨して日本のワイン文化の広まりに貢献した二つのまちに息づく歴史を知れば、ワインの味わいもより深くなる。



【シャトーカミヤ旧醸造場施設事務室(牛久市)】



【宮光園(甲州市)】

④ 栃木県（◎益子町）、茨城県（笠間市）

《かさましこ ～兄弟産地が紡ぐ“焼き物語”～》

日本屈指の窯業地「かさましこ」（茨城県笠間市と栃木県益子町）は、窯業や統治者によって古代から同じ文化圏でした。江戸時代に入り別々の道を歩みますが、18世紀後半から再び、製陶を通じてつながり合った地域です。使い勝手のいい日用品を作り続けていたこの地は、存続の危機に陥ると時代に合わせた革新に挑み、多様な作風を許容する産地へと変化しました。自由でおおらかな環境が創造する者を惹きつけ、今では600名を超える陶芸家が活躍しています。美意識を追求し美しい生活造形を生み出す「かさましこ」は、訪れる人の五感をも刺激し、暮らしに寄り添う独自の陶文化を醸成しているのです。



【窯焚き】



【益子陶器市】

⑤ 東京都（八王子市）

《^{れいきまんざん}靈氣満山 ^{たかおさん}高尾山 ^{ひとびと}～人々の祈りが紡ぐ^{いの}桑都^{つむ}物語^{そうともものがたり}～》

八王子は、養蚕や織物が盛んだったことから「桑都」と称されました。甲州道中最大の宿場町となり、さまざまな文化を育みながら発展してきたまちの礎は、戦国時代末期に関東の覇権を握った北条氏の名将・北条氏照が、城下町を築いたことに遡ります。

桑都の発展を支えた養蚕農家や絹商人は、氏照が武運を祈願し、いにしえより人々が霊山として崇めてきた高尾山を信仰し、大切に護ってきました。

高尾山では、今も人々の祈りとともに、江戸時代に花開いた桑都の伝統文化が連綿と受け継がれています。



【八王子城跡】



【火渡り祭】

⑥ 新潟県（十日町市）

《^{きゅうきょく}究極^{ゆきくに}の雪国とおかまち ^{しんせつ}—真説！豪雪地^{ごうせつち}ものがたり—》

世界有数の豪雪地として知られる十日町市。ここには豪雪に育まれた「着もの・食べもの・建もの・まつり・美」のものがたりが揃っている。人々は雪と闘いながらもその恵みを活かして暮らし、雪の中に楽しみさえも見出してこの地に住み継いできた。ここは真の豪雪地ものがたりを体感できる究極の雪国である。



【神宮寺観音堂・山門】

(写真提供：山田つとむ氏)



【婿投げ】

(写真提供：十日町市提供)

⑦ 福井県（◎南越前町，敦賀市），滋賀県（長浜市）

《^{うみ}海を越えた^{てつどう}鉄道 ～^{せかい}世界へつながる ^{てつる}鉄道のキセキ～》

ここに1枚の切符がある。今から約100年前に運行されていた欧亜国際連絡列車は、この切符で東京からベルリンまでの渡航が可能であった。シベリア鉄道の発着地であるウラジオストクと敦賀を結ぶ鉄道連絡船の就航により、鉄道は海を超え欧州へとつながった。

なぜ敦賀駅に国際列車が発着していたのか？それは、長浜市・敦賀市・南越前町の明治時代の鉄道の歴史と密接な関係がある。物語は、トンネルで日本海と琵琶湖を繋いだことから始まる。



【旧長浜駅舎】



【山中トンネル】

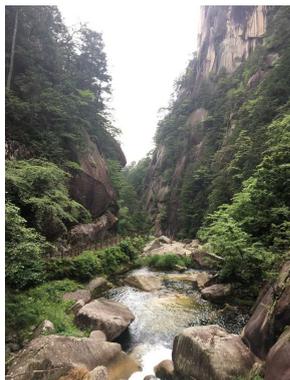


【敦賀港の景観】

⑧ 山梨県（◎甲府市，甲斐市）

《^{こうしゅう}甲州の^{たくみ}匠の^{げんりゅう}源流・^{みたけしやうせんきやう}御嶽昇仙峡 ～^{すいしやう}水晶の^{こどう}鼓動が^{みちび}導いた^{しんこう}信仰と^{わざ}技、そして^{せんしんぎじゆつ}先進技術へ～》

昇仙峡一带の山地は、水の塊と信じられていた水晶を産出する水源信仰の地であり、地域を流れる荒川上流を訪ねると、悠久の時をかけた浸食により形成された大小の滝や巨石、奇岩に驚かされます。水が作った芸術品ともいえるこの溪谷美は、江戸時代末期に行われた新道開削により奇跡的に出現したものですが、地域の人々の熱意により日本有数の景勝地として磨きあげられてきました。そして、昇仙峡一带で産出された豊富な水晶とその加工技術は、匠の技として日本一のジュエリー産業の基盤となり、更には人工水晶製造技術へと繋がってスマートフォンなどの電子機器に使用されるなど、過去から現代に至る私たちの生活を支えているのです。



【昇仙峡】



【金峰山】

⑨ 長野県（千曲市）

《^{つき みやこ}月の都 ^{ちくま}千曲 ^{おぼすて たなだ}—姨捨の棚田がつくる^{ま か ふ し ぎ}摩訶不思議な^{つきけしき}月景色^{たごと つき}「田毎の月」—》

日本人の美意識を表す「月見」。中でも、歴史的に文学や絵画の題材となってきた「^{おぼすてやま}姨捨山に照る月」、「^{たごと}田毎の月」は、日本を代表する月見の名所である。

姨捨は、地名の響きから、棄老物語を語り伝えてきた。それは、月見にちなむ文芸への遊び心を鼓舞する一方、棚田での耕作や伝統行事を通じて古老の知恵と地域の絆を大切にする教えを育んできた。

すべての棚田に映る月影を1枚の浮世絵に表した^{うたがわひろしげ}歌川広重の摩訶不思議な「田毎の月」。そんな「古来の月見」や、「月の都 千曲」が奏でる「新しい月見」に出かけよう。



【歌川広重作
摩訶不思議な田毎の月】



【鏡台山から昇る満月】

⑩ 長野県（上田市）

《^{たいよう}レイラインがつなが^{だいち}「太陽と大地の聖地」^{せいち} ~ ^{りゅう}龍と^い生きるまち ^{しんしゅううえだ}信州上田・^{しおだいら}塩田平~》

独鈷山と夫神岳から扇状に開ける地・塩田平は、古来「聖地」として、多くの神社仏閣が建てられている。

山のふもとにある信州最古の温泉といわれる別所温泉、「国土・大地」を御神体とする「生島足島神社」、「大日如来・太陽」を安置する「信濃国分寺」は、1本の直線状に配置され、レイラインをつないでいる。

夏至と冬至に、鳥居の中を太陽の光が通り抜け、神々しくぬくもりのある輝きを享受できるのだ。先人たちが、この地が特別であると後世に伝えようと遺した様々な仕掛けは、今も、訪れる人びとにパワーをチャージさせる



【安楽寺木造三重塔（○岡田光司）】



【生島足島神社（冬至の落陽）
（○上田市）】

⑪ 静岡県 (◎藤枝市, 静岡市)

《日本初「旅ブーム」を起こした弥次さん喜多さん、駿州の旅 ~滑稽本と浮世絵が描く東海道旅のガイドブック (道中記) ~》

日本初の「旅の大ブーム」の火付け役は、十返舎一九の滑稽本「東海道中膝栗毛」であり、歌川広重の描いた「東海道五十三次」の浮世絵であった。「滑稽さ」「怖いもの見たさ」そして美味しい「名物」に引き寄せられるのは人の世の常。日本の「ガイドブックの原典」とも言われる「浮世絵」「滑稽本」に惹かれ、自由な移動が制限される江戸時代でも人々は物見遊山の旅へいそいそと出かけて行った。弥次さん喜多さんの「旅の楽しさ」は今も駿州で体感できる。富士山を仰ぎ見ながら江戸時代の「ガイドブック (道中記)」を片手に「東海道五十三次」の「真ん中」、駿州を巡る旅に出よう。



【丸子宿・丁子屋】



【岡部宿大旅籠柏屋 (弥次喜多)】

⑫ 京都府 (◎京都市), 滋賀県 (大津市)

《京都と大津を繋ぐ希望の水路 琵琶湖疏水 ~舟に乗り、歩いて触れる明治のひとつとき》

今も京都に「命の水」を運び続ける琵琶湖疏水。遊覧船に乗り、疏水沿いを歩いて触れられるのは、明治の偉業から生まれた、京都と大津の知られざる魅力です。

明治維新の東京奠都によって、人口が大きく減少した京都の人々は、琵琶湖疏水の建設に、まちの再生の望みを託し、多くの困難を乗り越え、日本で初めて、日本人のみの手によって、この大土木事業を成し遂げました。豊富な水は水力発電、舟運、防火用水、庭園群、水道などに利用され、経済や産業、文化を発展させました。

京都を再生と飛躍に導き、現在のまちの姿を形づくった琵琶湖疏水は、今も京都と大津を繋ぎ、まちと暮らしを潤し続けています。琵琶湖疏水を舟で遊覧し、沿線や施設を歩くことで、明治の時代のこの壮大な事業が、時を超えて今に息づいていることを、感じる事ができるでしょう。



【第一トンネル東口】



【旧御所水道ポンプ室とれいわ号】

⑬ 大阪府（◎河内長野市），奈良県（宇陀市），和歌山県（九度山町，高野町）

《女性とともに今に息づく女人高野 ～時を超え、時に合わせて見守り続ける癒しの聖地～》

高野山は、近代まで「女人結界」が定められ、境内での女性たちの参拝は叶わなかった。そんな時代にあっても女性たちの、身内の冥福を祈る声、明日の安らぎを願う声を聴いていた、「女人高野」と呼ばれるお寺があった。

優美な曲線を描くお堂の屋根、静かに願いを聞いて柔和なお顔の仏像、四季の移ろいを映す周囲の樹々、これらが調和した空間を『名所図会』は見事に実写し、表現した。そこに描かれた「女人高野」は時を超え、時に合わせて女性とともに今に息づき、訪れる女性たちを癒し続けている。



【金剛寺の
ピンクリボン
ライトアップ】



【室生寺の五重塔】



【慈尊院の乳型絵馬】



【女人結界と女人堂】

⑭ 兵庫県（◎伊丹市，尼崎市，西宮市，芦屋市，神戸市）

《「伊丹諸白」と「灘の生一本」 下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷》

江戸時代、伊丹、西宮・灘の酒造家たちは、優れた技術、良質な米と水、酒輸送専用の樽廻船によって、「下り酒」と称賛された上質の酒を江戸へ届け、清酒のスタンダードを築きました。酒造家たちの技術革新への情熱は、伝統ある酒蔵としての矜持と進取の気風を生み、「阪神間」の文化を育みました。

六甲山の風土と人に恵まれたこの地では、水を守り米を育てる人々、祭りに集う人々、酒の香漂う酒造地帯を訪れ、蔵開きを楽しむ人々が共にあり、400年の伝統と革新の清酒が造られています。



【現存する日本最古の酒蔵
「旧岡田家住宅・酒蔵」】



【酒造りの天与の霊水
湧き出る「宮水」】

⑮ 奈良県（◎三郷町），大阪府（柏原市）

《もう、すべらせない！！ ～龍田古道の心臓部「亀の瀬」を越えてゆけ～》

「亀の瀬」、それは奈良と大阪の国境に位置し、奈良盆地の水を一手に集める溪谷地帯。ここは、4 万年前から地すべりが繰り返されてきた難所でありながら、古代より都の西の玄関口として交通・経済・治水を支えてきた心臓部だ。万葉びとが歌に詠み、文物の往来によって発展を遂げた「龍田古道」は、地すべりの恐怖と隣り合わせにある。古代からこれまで、人々は都度の最新技術を結集させてこの要衝地を守り、龍田の風の神がその歴史と常にともにあった。

龍田の風を肌を感じながら古道を歩いてみよう。土砂に埋もれた鉄道トンネルを覗き、未来の暮らしを支える土木技術に触れ、いざ亀の瀬を越えたとき、自然の驚異と寄り添い暮らし日本人ならではの心のありようが見えてくる



【龍田大社拝殿】



【地すべりに埋もれた亀の瀬トンネル】

⑯ ◎和歌山県（和歌山市，橋本市，紀の川市，岩出市，かつらぎ町），大阪府（岸和田市，泉佐野市，河内長野市，和泉市，柏原市，阪南市，岬町，河南町，千早赤阪村），奈良県（五條市，御所市，香芝市，葛城市，王寺町）

《「葛城修験」一里人とともに守り伝える修験道はじまりの地》

和歌山～大阪～奈良の境に聳える葛城の峰々。修験道の開祖と言われる役行者がはじめて修行を積んだこの地は、世界遺産の吉野・大峯と並ぶ「修験の二大聖地」と称されています。この地には、役行者が法華経を1品ずつ埋納したという28の経塚があり、今も修験者たちは、その経塚や縁の寺社、滝や巨石を巡ります。そしてその修行にはいつの時代も、この地に暮らす人々との深いつながりがありました。

修験者や地域の人々が大切にしてきた聖地「葛城修験」― 修験道の歴史は、ここから始まりました。



【紀州加太浦「採燈大護摩供」】



【中津川行者堂】

⑪ 島根県（益田市）

《中世日本の傑作 益田を味わう ー地方の時代に輝き再びー》

海に国境のない時代—中世。山陰地方の西端のまち益田は、その地理と地域資源を活かして、大きな輝きを放っていました。

人々は、中国や朝鮮半島に近い地理と、中国山地がもたらす材木や鉱物などの地域資源を活かして、日本海交易を進めました。領主益田氏は、自らも交易に積極的に関与し、優れた政治手腕を発揮して平和を実現しました。経済的繁栄と政治的安定のもと、東アジアの影響も受け、どこにもない文化が花開きました。

現在の益田にはその歴史を物語る、港、城、館の遺跡と景観、寺院や神社、町並み、庭園、絵画、仏像などの一級品がまとまって残っています。

このように、時代と地域の特性を活かして輝いた益田は、中世日本の傑作と言え、全国でも希少な中世日本を味わうことのできるまちです。



【萬福寺本堂】



【高津川】

⑫ 島根県（大田市）

《石見の火山が伝える悠久の歴史 ～”縄文の森” ”銀の山”と出逢える旅へ～》

地下へ続く階段を下りていくと、目の前にそびえ立つ幾本もの巨大な木一。三瓶山の噴火で地中深くに埋まった縄文時代の木々が、悠久の時を超え、当時のままの姿を現しているのです。

火山大国である日本。

人々を脅かす噴火ですが、石見の国おおだには様々な恩恵をもたらしてくれました。かつて世界に「ジパング（日本）」の名をとどろかせた石見銀山の鉱床もマグマから生まれたのです。

そして火山が育んだ豊かな大地は生活を潤してくれました。

暮らしの根っこに火山の歴史が息づくまち、石見の国おおだ。ここには火の国のめぐみと出逢える旅が待っています。



【三瓶山の牧野景観】



【埋没林全体】

⑱ 岡山県 (◎高梁市)

《「^{はっしょう}ジャパンレッド」^ち発祥の地 ^{べんがら}一弁柄と ^{あかがね}銅の町・^{まち}備中吹屋^{びつちゅうふきや}》

標高約 500m の高原上に忽然と出現する「赤い町並み」。かつて国内屈指の^{べんがら}弁柄と^{あかがね}銅生産で繁栄した^{くたにやま}鉦山町・吹屋である。吹屋で生産された赤色顔料の弁柄は全国に流通し、社寺などの建築や^{くたにやま}丸谷焼・^{いまりやま}伊万里焼や^{わじまぬり}輪島塗等、日本を代表する工芸品を鮮やかに彩り、日本のイメージカラーである「ジャパンレッド」を創出した。富を得た商人たちは赤い瓦と弁柄で彩色された^{こうし}格子で家々を飾り、今も残る町並みは、独特の景観を醸し出し、訪れる多くの人々を魅了している。また、周辺には、弁柄工場跡や銅山跡等も残り、「ジャパンレッド」を創出した往時の繁栄を偲ばせている。



【ボンネットバスの走る吹屋の町並み】



【整備された旧弁柄工場 (ベンガラ館)】

⑳ 長崎県 (◎長崎市, 諫早市, 大村市), 福岡県 (飯塚市, 北九州市), 佐賀県 (嬉野市, 小城市, 佐賀市)

《^{さとうぶんか}砂糖文化を^{ひろ}広めた^{ながさきかいどう}長崎街道 ~シュガーロード~》

室町時代末頃から江戸時代、西洋や中国との貿易で日本に流入した砂糖は、日本の人々の食生活に大きな影響を与えた。なかでも、海外貿易の窓口であった長崎と小倉を繋ぐ長崎街道沿いの地域には、砂糖や外国由来の菓子が多く流入し、独特の食文化が花開いた。現在でも、宿場町をはじめ、当時の長崎街道を偲ばせる景観とともに、個性豊かな菓子が残されている。

輸入砂糖や菓子と関わりの深い長崎街道「シュガーロード」を辿ると、長崎街道の歴史だけでなく、400 年以上もの時をかけて発展し続ける砂糖や菓子の文化に触れることができる。



【出島和蘭商館跡】



【塩田津街並み】

② 熊本県（八代市）

《^{やつしろ たがや いしく きせき}八代を創造した石工たちの軌跡 ^{いしく さと いき いしづく}～石工の郷に息づく石造りのレガシー～》

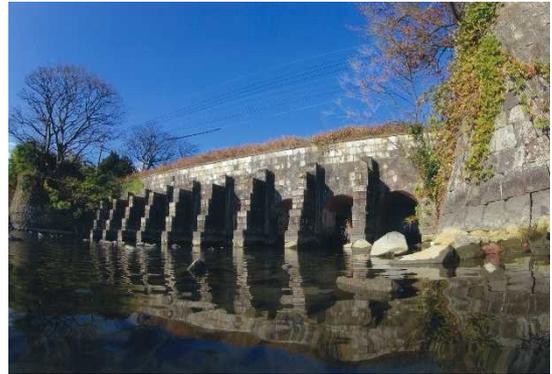
かつて全国で築かれた「めがね橋」の4分の1が分布する熊本。その殆どは八代で生まれ育った石工たちによって手掛けられました。彼らの卓越した手腕は日本各地で必要とされ、「神田万世橋」や「通潤橋」などの架設を成功に導き、全国に名声を轟かせるまでに至りました。それ故に、八代は多くの「名石工」を輩出した「石工の郷」と呼ばれています。

石工たちは、八代に広大な平野と豊かな実りをもたらした「干拓事業」や、地域の交通を支えた「めがね橋」の架設などに携わり、八代の発展と人々の生活基盤づくりに長きにわたって貢献する中で、己の技を磨き上げ、名もなき石工から名石工へと成長していったのです。

彼らが築いた堅牢な干拓樋門、川面に美しいアーチを描くめがね橋、見事な棚田の石垣などの石造りのレガシーは百余年たった今も、まちの景観や人々の暮らしの中に生き続けており、訪れる人々を「石工の郷」へと誘ってくれます。



【笠松橋】



【旧郡築新地甲号樋門】